Last　LOVE

ももたろす

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｌａｓｔ　ＬＯＶＥ

【Ｎコード】
Ｎ０７４８Ｖ

【作者名】
ももたろす

【あらすじ】
生まれて初めての告白を近所のモテ男「なおき」に知られてしまった・・・
なおきがちょっかいを掛けてくる本当の理由は・・・？

Last　LOVE

「付き合ってください！」
生まれて初めての告白。
お相手は
１つ年上の先輩。野球部。
一目惚れ・・・

「え？おれ？なんでおれ？喋った事あったっけ？」
「無いです・・・」
「返事は待ってて？」
「はい！」
「じゃあね！」

やったあああ／／／
これいけんじゃね？あはっ

ビクッ

後ろを振り返ると・・・

「よっ！」
ホッ・・・
「なんだ・・・なおきか・・・」
「なんだとはなんだ！」
「いや・・・北原先輩だと思った！えへへ」

「・・・」

なおきは家も近くて一つ年上の先輩。

「もしかしてさあ、」
「ん？」
「舜［北原］に告ッた？」
「なっ・・・！」
「北原はやめとけ。」
「なんでなおきにそんな事いわれなくちゃいけないの！？」
「・・・・・・だから」
「え？」
「４年前からお前のことが好きだからだよ！」

トク・・・トク・・・・・・・・

え？なおきが？私を？
「なおきはモテるんだからそんな事軽々しく言わないほうがいいよ！」

「おれは・・・おれは本気で！」
「黙って！」
「・・・」
「もう分かったから・・・」
「じゃあ付き合ってくれんの？」
「・・・・・が好き」

「え？」

「私は北原先輩が好きなんだって！」

ジャリッ・・・―

え？
「あ！先輩！」
「おい！舜！お前本気でこいつと付き合う気あんのかよ！」
「もうやめてよ！北原先輩が迷惑してるじゃん！」
「迷惑なんかじゃないよ・・・付き合う気・・・有るよ」
「勝田さんだよね？」
「は・・・はい・・・」
「付きあお。」
「・・・っつ・・・」
「じゃあ帰り教室まで迎えに行くから！」
「はーい・・・」
私に向かって手を振る先輩・・・
夢のようだった・・・
でも、どうしてだろうか、
気持ちが晴れない・・・
「なおき・・・ごめん・・・」
「もういいよ・・・」
「でも！私・・・なおきのことは好きだから！」
「はっ・・・思わせ振りなんだよ！」
ブンッ・・・
「きゃっ・・・」

「ごめん・・・悪かった・・・・」
「・・・」
「もう話しかけたりもしないから・・・・」
「えっ・・・・」
「じゃあな」

「・・・・」

私は何をしたかったのだろう・・・

「うっ・・・うっ・・・・」

《ブーブーブー》
携帯が鳴った・・・・―

Last LOVE ~2~

「・・・・・・もしもし・・・・」
《もしもし！よっ！》
「北原先輩・・・こんにちは・・・・」
《明日の祭り一緒行く？》
「はい・・・・！」
《今更だけど、俺、なんて呼べばい？》
「えっ・・・・」
《下の名前がいいか？》
「えっ・・・・と・・・・えへへ」
《照れてるな！はっ。下の名前は？》
「利久です」
《じゃあ“りく”って呼ばないとな！俺のことは舜でいいから！》
「しゅんくんって呼びます・・・・」
《了解。ははっ。じゃあ明日、三角公園の像の前で待ってるわ！7時な！》
「はー・・・・い」

ブチッ・・・・―

はぁ・・・
なんかちっとも楽しく無いや・・・
毎年、なおきが家まで迎えに来てくれてた・・・
どうしてだろう・・・今、なおきの事で頭がいっぱいになりそうだ・・・

ホント、今更だ・・・

―翌日―

今日か・・・

「お母さーん。浴衣出してー。」
「あんた今年もなおきくんと行くの？」
「・・・ううん・・・今年は違う・・・」
「そっかそっか・・・じゃあ誰と行くの？」
「・・・北原先輩・・・・・・」
「付き合ってるの？」
「うん・・・ごめんね何にも言わないで・・・」
「りくが元気ならそれでいいわよ」
「・・・うん・・・・・・」

浴衣を着るのは久しぶりだ・・・

「はい！完成！」
「お母さんありがと・・・」
「いいわよ」

「じゃあ行ってくる！」

「いってらっしゃい」

今は６：４０だ

歩いていると、三角公園が見えた・・・
６：５０だ

先輩はもう着いている・・・

「先輩！」

「りく！よ！」

「しゅんくん・・・」

「ん？」

「私・・・今日ものすごく楽しみ・・・えへへ」

「俺も！」

「あともう一つ聞きたいんだけど・・・」

「ん？何？」

「浴衣・・・どう？」

「・・・・・・可愛い・・・言わせんなよなっ！あはは」

「えへへ」

「お前は可愛いよ・・・」

出店を見て回っていると

「おっすー舜じゃん！」

「おお！」

「アレアレ～？」

なんかもの言いたげな顔でこっちを見ている・・・

「その子誰かな？」

「俺の彼女」

「何ちゃん？」

「勝田　利久です・・・」

「りくちゃんか！えっ・・・勝田・・・勝田・・・・・・・・あ！」

「？」

「いっつもなおきと一緒にいる子？」

「・・・・・・」

「もうお前らいいだろ！」

しゅんくん・・・―
「一緒に回ろーぜー」
「いや、りくと来てるから」
「ちっ。分かったよー」
「悪かったよ。じゃーな」
「「「おう！」」」

「りく・・・」
「ん？」
「さっきは悪かったな・・・」
「何がですか！」
「いや・・・なんでもないよ・・・チョコバナナ食べるか！？」
「えっ・・・でも・・・」
「俺の奢りだから！」
「あ・・・あ・・・ありがとうございます・・・えへへ嬉しいです」
「ほら！俺も一口～」
「はい。あーんしてあげます！」
「え！ちょい待ち！」
「えっ・・・すっ・・・すいませんでした！調子乗っちゃいました！」
「じゃなくて・・・照れただけ・・・あまりにも可愛すぎて・・・」
「・・・」
「じゃあもっかいしてよ・・・」
「え・・・―」
「いや？」
「いいいいい嫌な訳ないです！」
「ふっ・・・」
「あー・・・ん」
「ありがと・・・美味しい・・・ははっ」

「りく・・・」
「はい？」
「あーん」
「んっ・・・」
「美味いだろ？」
「・・・はい・・・・・・」
「あ、間接チューだ！やり～」
「ちょちょっと！」
「あはは！え？直接してほしかった？」
「・・・・」
「怒んないでよー」
「・・・・・・」
「も～・・・・」
「んっ・・・・」

私にキスをした。

「どうだった？直接はやだった？」
「う・・・嬉しかった・・・・・・・です・・・・」
「可愛すぎ！あ、もう９：００だ帰るか！」
「はい・・・・」

「ありがとうございました・・・・」
「おう！じゃあまたな！」

ものすごく楽しかった・・・

ヴーヴー・・・

メールだ！
《新着メール１件》
誰だろ・・・先輩かな？
〔なおき〕
え・・・
なおきの事忘れてた・・・
『月曜からは学校一緒に行かないでおこう』
私だって彼氏できたんだもんね！
なおきの事忘れさせてくれる最高の彼氏が・・・
しゅんくんにメール送ろう
〔ありがとうございました！〕
『今日はありがとうございました！楽しかったです！月曜から一緒に学校行きませんか？』
ヴーヴー
『おれも楽しかった！じゃあ月曜にりくん家迎えに行くから』
『ありがとうございます！おやすみなさい』
ヴーヴー
『おう。おやすみ』

月曜が楽しみだ・・・

Last LOVE~3~

ああ・・・まだ眠たい・・・
起きてるのに気が起きない・・・

「りくーーーーーーーー！起きてるのー？」
「・・・」
ドンドンドン・・・・―
ガチャー
「起きてるなら返事なさい！」
「・・・」
「まあ、いいわ。朝ごはん食べましょう。」
「はー・・・・い」

「オレンジジュースでいい？」
「うん・・・・」
「・・・・」
「・・・・」
「・・・・」
「・・・美味しいね・・・・」
「あら。珍しいわね。美味しいのは当たり前！ふふっ」
「だね！」
「元気。出たみたいだね。」
「もともと元気だよ！」
「あら、そ？」

ピンポーン・・・

先輩だ！

「行ってくる！」
「いってらっしゃーい」

ガチャリッー

「は・・・はい・・・・」
「りくおはよ！」
「しゅんくんおはよ・・・・」
「いこうか」
「はいっ！」

「！」
「りくどうかした？」
「い・・・いや・・・何でも・・・・」
「そ？」
コクリと頭を振る私。
「あ！なおきじゃん！」
「おー・・・・」

目が合うとすぐ目を背けた。

「2人とも仲良くな！」
「おー！」

そんなこと言われなくても分かってる・・・
でもその一言が心に引っかかった・・・

なおきを見ると胸が苦しい
ギュー・・・ってなって・・・でも。嫌ではない・・・

こんな気持ち初めてだ・・・

Last LOVE~4~

いい加減自分の気持ちに気づく。
なおきには酷いことをした
好きなる資格なんて無い。

―なんにも無かったように振舞う―
・・・これが私にできることだ。

いつも通り起きて学校に行く仕度をする。

毎日、しゅんくんは家まで迎えに来てくれている。

ピンポーン・・・

「じゅあ行ってきます」
「あ！お弁当忘れてるわよ！」
「ああ・・・ごめん。ありがと。じゃあ」
「最近元気ないけどどうかした？」
「なんでもないって～！」
「そ？相談位しなさいよ」
「は～い」

ガチャ

「おはよ・・・」

「おう・・・おはよ」
「・・・」
「・・・・・・」
先輩はお構い無しに話を切り出した。
「なぁ、」
「は・・・はい・・・」
「りくってさ」
「・・・」
「なおきの事どう思ってんの？」
「え・・・」
「好きなら好きって言ってくれ！」
「た・・・ただのお・・・お兄ちゃんみたいな感じな・・・だけ・・・」
「・・・・・・そっか」
「うん・・・」
「・・・」
「どうしてそんな事聞くの？」
「いや・・・昨日さ」

『しゅん・・・お前りくのこと好きなのか？』
『は？何言ってんの？』
『軽い気持ちでりくに近づくな。』
『は？誰がいつ軽い気持ちで付き合ったって言った？』
『お前は俺と張り合うためにりくを奪ったんだろ？』
『なんでお前にそんなこと言われなくちゃならないんだよ！』
『俺、りくが好きだから。でも振られてる。』
『じゃあ首突っ込んでくんな。』
『・・・から・・・』
『あ？』
『だから尚更りくには笑顔でいてほしんだよ！軽い気持ちで近づく

な分かったか』
『わかったよ。』
『もし別れるなら言ってくれ。りくは俺が貰う』
『っつ・・・』

「ごめんな・・・なおきには軽い気持ちで付き合ってるように見えんだな・・・」
「ありがとう・・・」
「え？」
「大事にしてくれてありがとう・・・」
「俺もりくに大事なもん教わってるよ・・・ありがとな・・・」
「私、しゅんくんと別れる気ないから！」
「ふっ・・・俺も・・・」

「じゃあ、帰り待ってるねー！」
「おー」
「じゃね！」

手を振る私。

「りく！おはよ！」
「アスカおはよ！」
「北原先輩と彼カノやってんじゃん！」
「・・・うん」
「どした？」
「ううん！今日お昼のお弁当忘れかけてさー・・・—」
「—」
「—」

キーンコーンカーンコーン・・・

「りくお昼だよ！」
「やった！」
「たまご焼きくれ！」
「えー。あはは！」

「勝田さん・・・」
「ん？西田っちどうかした？」
「北原？先輩が呼んでるよ・・・」
「なんだろ？あ。ありがと」
「ううん」

「しゅんくんどうかした？」
「なおきに色々言われてるからこれから休み時間、昼休みは一緒にいよう」
「・・・」
「いや？」
「嬉しいです・・・」
「じゃあ、早速裏庭で食べよう！」
「はい！お弁当持ってきますね！」
「おう。」

「おまたせしました！」
「いくべ！」
「外で食べるの初めてです」
「そ？美味いだろ？」
「はい！」
「たまご食べたいな。はい、あーん。は？」

「・・・恥ずかしいですよ・・・・・・・・」
「いいじゃん！」
「あーん」
「あー・・・・」

「イチャつくな！」
「松先じゃん！」
「なんだお前1年の子と付き合ってるのか！」
「悪ぃかよ。」
「何ちゃん？」
「勝田利久です！」
「初代校長と同じ名前だ。」
「それ私のおじいちゃんです。」
「「えーーーーーーーーーーーーー！」」
「ん？」
「いや先生なのにバカなところを見せてしまったな・・・ゴホンッ・・・」
「あはは！」
「イチャついててもいいぞー。でも時間は守れよー」
「はーい。」

「改めて。あーん」
「うめ」
「そ？」
「うん。りくの味がする」
「恥ず・・・かし・・・い・・・・よ？」
「可愛いな！」

「昼休み終わっちゃう！じゃあ、また帰りね！靴箱で待ってるから！」

「じゃーな！」

「ただいまー。」
「愛しの彼かっこいいじゃん！」
「うん・・・まぁね・・・」
「いいな！」
「アスカあとで相談乗ってほしいんだけど・・・」
「いいよ」
「今でもいい？」
「うん。どーぞ」
「近所にしゅんくんと同学年のイケメンの先輩がいるの」
「うん」
「それで、毎朝一緒に登校して毎年2人で祭りも行って仲良かったの」
「うん」
「で、告白されたの・・・。」
「なんて返事したの？」
「私はしゅんくんが好きだって言ったの」
「一番大事なのは今のりくの気持ちだよ。」
「そっか！」
「もう少しゆっくり時間をかけて北原先輩を知っていけばいいと思う・・・」
「だね！ありがと！」

気持ちが落ち着いた。

「おい勝田ってあんた？」
「そうですけど？」
「ちょっと来いよ。」

「入学してすぐ彼氏作るとかいい度胸してんね」
「・・・」
「何とか言えよ！」
ブンッ・・・
パシッ・・・
「やめろよ」
「なお・・・き・・・？」
「この子はまだ1年生だ。手出すな。りく行くぞ。」
「う・・・うん」
「・・・・・・」
「・・・・」
「・・・・」
「ありがとう・・・」
「もう俺はりくに関わらないし助けたりもしない。」

「じゃあさ・・・」
「ん？」
「じゃあ、最後でいいから明日、放課後屋上にきてよ。」
「は？」
「じゃあね！」

「っけわかんね・・・」

本当の事を言うと決めたんだ・・・

Last LOVE~5~

「りくー帰ろー」
「しゅんくん！今行く！」

「ちょっとまって」
腕を掴まれた。
「え？」

しゅんくんがこっちにくる。
「どうした？」
「いや・・・わかんない・・・」

腕を掴んだ人が口を開いた
「ちょっと話があるんだけど・・・」
「はい？」
「こいつって彼氏？」
「はい！彼氏です」
「こんな状況で言うことじゃないな・・・」
「え？」
「俺と付き合ってほしんだけど。」
「え・・・」
「ちょ・・・ちょっと待てよ！なんなんだよ！」
「こいつより幸せにできるよ」
「っけわかんねえ・・・」
「あの・・・」
「ん？」
「3年生ですよね？しゃべったこと有りましたっけ？」
「いいや。ないよ。一目惚れってやつだ」

「え・・・」
「りく。早く返事してくれ。俺も返事が気になる。」
「あ・・・」
「あ？」
「ごめんなさい。私は彼氏がいるので他の人にフラフラしてるのは嫌なんです。」
「そっか。ふっ・・・・」
ズキンッ・・・
悲しそうな顔で笑う先輩に心が傷んだ。

「せめてアド交換とか無理かな？」
「えっと・・・しゅんくんいい？」
「いいよ・・・・」
「じゃあアド交換だけ・・・・」
「ありがと・・・・」

「じゃあ俺はこれで！」
「さよなら～」

「・・・」
「ねぇ・・・しゅんくん」
「・・・」
「しゅんくん？」
「っんだよっ。」
びくっ
「ああ・・・ごめんね」
「いつだよ・・・」
「え？」
「いつあいつに惚れられるようなことしたんだよ！」

「そ・・・そんなの知らない・・・・」
「信じらんねっ・・・・」
「しゅんくんごめんね彼女失格だね」
「は？」
「私。もう別れたい」

Last LOVE~6~

「おい！嘘だろ？冗談だよな！？」
「ごめん。もうやっていく自信ない。」
「ごめん！俺が悪かったら言ってくれ！直すから！だから・・・」
「黙って！」
「・・・っ・・・つ」
「もうわかったから・・・」
「何が分かったんだよ！何にも分かってねえじゃねえか！」
「もう無理だよ。」
涙が止まらなくなった・・・―

「ごめんっ・・・」
「ううん・・・私こそ・・・」
「帰るか」
「え・・・」
「今日だけだよ・・・な？」
「うん。ありがと・・・そしてごめんね」
「今週は彼女としていてよ・・・ダメ？」
「でも・・・」
「もしかして好きな人できた？」
「え・・・」
「図星かよ・・・はっ」
「・・・」
「最初っから言えよ！」
「ごめ・・・」
「誰？」
「え？」
「誰だって聞いてんの」

「でも・・・」
「なおきだろ？」
「えっ・・・」
「好きならいけばいいよ」
「でも・・・」
「いけよ！」
「ご・・・めん・・・」
「・・・・・・」
「いってくる！」

もっと速く・・・もっと速く走れ！
ピンポンピンポンピンポーン

「りく？」
「なおき・・・」
「どうした？しゅんと別れたのか？」
「うん・・・」
「あいつっ・・・」
「違うの！」
「何が違うんだよ？」
「私が振ったの！好きな人がいるって・・・」
「え・・・」
「心配かけて・・・ごめん・・・・・・」

頭がクラクラする・・・
立ってられない・・・

ぱちっ・・・

アレ？ここ私の部屋ではない・・・
一体誰の・・・

「起きた？」
「え・・・」
なおきの部屋だ
「お前いきなり倒れるから。」
「ありがとう・・・」
「聞きたいんだけど、」
「ん？」
「好きな人がいるってマジ？」
「う・・・うん・・・」
ゴクッ・・・

「誰？」
「・・・だよ！」
「は？」
「なおきだよ！」
「なんであの時・・・」
「なおきはモテるから皆にやめとけって言われたの！」
「・・・」
「違う人を好きになろうと思って、」
「だから、しゅんを好きになったの？」
「ん・・・」
「てことは俺はこれからも好きでいていいの？」
「え・・・」
「ごめんな諦め悪くて・・・」
頭を思いっきり左右に振った。
「嫌いに・・・なって・・・なかった・・・の？」

「なってるわけねえじゃん！」
「ありがと・・・本当にありがとう・・・・」
「りく大好きだよ大事にするから」
このままずっと一緒に歩いていけたらいいな・・・・―

Last LOVE~6~（後書き）

完結みたいになってますがまだ続きます。

Last LOVE~7~

「ねぇなおき」
「どうした？」
「今日しゅんくんに会ってくる。」
「・・・おう。」
「うん」

「あ。アスカおはよ」
「噂になってっけど北原先輩と別れたってマジ？」
「・・・うん」
「そっか・・・それがりくの選んだ道だもんね！」
「うん」
「誰か紹介したろか？」
「いや・・・なおきと付き合ってる・・・」
「そっか・・・」
「じゃあちょっと行ってくる・・・」

「しゅんくん！」
息を切らして走る私にしゅんくんは目を見開いた・・・

「どうした？」
「昨日はごめん・・・」
「いや・・・もういいよ・・・」
「・・・」
「幸せにな」
「はい！」

「じゃあ・・・」
「先輩！今まで優しくしてくれたりしてありがとうございました！楽しかったです！」
「ふっ・・・俺も！じゃあ・・・またな！」
「さよなら！」

「けじめつけれたみたいだね」
「なおき・・・」
「ご褒美としてチュウしてやろうか！」
「あ！もう一人忘れてた！」
「なんだよ～・・・」
「行くよ！」

「先輩！」
「りくちゃん！」
「こないだはありがとうございました！あと・・・振ってごめんなさい・・・」
「そんなのいいよ！振られるの覚悟で告ったんだし！」
「ありがとうございます！では！」

「リーっく！」
「・・・んっ・・・・・・」
私に優しくキスをした。

「やだった？」
「・・・またしてね？」
「ぶっ・・・照れるじゃねえか！」

「ははっ」

「勝田利久ってあんただよね？」
「はい？」
「ちょっとこい」
「俺も行く。」
「中川なおき。あんたは来なくていい」
「で・・・でも」
「なおき・・・来ないで？ね？」
「わかったよ」
「いってくる。」

Last LOVE~8~

「なんですか？私、何かしました？」
「生意気な1年だな・・・」
「へ？」
「あんたさ、裏でなんて呼ばれてるか知ってる？」
「知りません。」
「ブサ女って呼ばれてるよーん」
「だからどうしました？」
「生意気だな。はっ。」
「なんて言われてもいいですけど、周りの人を巻き込まないでください」
「あんたには何してもいいんだあ？」
「度が過ぎるのは無理です。」
「あんたっていったい誰が好きなの？」
「え？」
「地味なくせに3年から好かれて、結局なおきと付き合って・・・しゅんを振ったじゃない」
「嫌いで付き合うわけ無いじゃないですか。」
「あんたを恨んでる子も多いけど、羨んでる子もいっぱいいるよ？」
「・・・」
「本気で、しゅんやなおきを好きだった女の子だっていっぱいいる」
「でもなおきは私を選んでくれた。」
「まぁ、結果はそうでも、周りの子は傷ついてる。」
「わかってます。」
「あんたを傷つけようなんて思ったことも無いけど、周りの子のためになおきと別れなさい！」
「え・・・」
「他と付き合え！」

「なおき～・・・」
バッ・・・―
私を力いっぱい抱き締めた。

「や～っと帰ってきた・・・」
「なおき・・・」
「ん？」
ニコニコしているなおきに別れを告げた・・・―
“別れよう”

Last LOVE~9~

「・・・」
「・・・」
「そっかそっか！もう俺は要らないか！」
「そんなんじゃなくて・・・」
「じゃあ何？」
「・・・」
「りくってさ、俺はなにしても怒らないと思ってるよね？」
「そんなこと・・・」
「ある。」
「・・・ごめんなさい」
「何がいけなかった？」
「なおきがどうとかじゃなくて・・・」
「・・・」
「先輩に別れろって言われたの」
「ふ～んそれで別れるんだ？」
「っつ・・・」
「・・・」
「なおきに迷惑かけたくないの！」
「そっか。俺のため・・・か・・・。いいよ別れよ。」
「・・・うん」
自分ってどんなに我が儘なんだろう。
そう思った・・・

「りくちゃーーん」
「先輩・・・」
「なおきと別れてくれた？」
「・・・はい」

「しゃーねーな。新しいの紹介したげる」
「はい・・・」
「あやなーちょっときてーー」

だるそうな顔をしてこちらに顔を向けた・・・
「なに？てかこの子誰？」
「誰って！知らないの！？勝田利久ちゃんだよ！」
「ん」
「ごめんねりくちゃんこいつモテんだけど、性格悪いんだわ」
「へ～・・・」
「んで何？」
「りくちゃんね、私たちのお願い叶えてくれたの」
「どんなお願い？」
「なおきと別れること」
私の腕を思いっきり掴んだ
「！！」
「お前それでいいのか！？」
「なおきに迷惑は掛けたくないし・・・」
「そこで！りくちゃんにはなおきを忘れてもらうべく、誰か、男の子を紹介しようと思ったの！」
「・・・ありがとうございます」
「いいのよ！なおきのことありがとね。」
「で？俺を紹介したのか？」
「そ！」
「っざけんな！この子の気持ち考えてみろよ！」
「・・・」
「別れて直ぐ男紹介されても嬉しくないだろ！」
「・・・先輩・・・もう・・・なおきのことはいいんです・・・」

そう思ってたのに泣き崩れた私を優しく抱き締めたのは

あやな先輩だった・・・

「ごめんなさい・・・取り乱しちゃって・・・えへへ」

「おい、勝田・・・まだ泣きたいんだろ？泣いていいよ・・・」

「はい・・・」

Last LOVE~10~

「家まで送ってもらっちゃってすみませんでした・・・」
「良いって!!俺が勝手にやったことだし!」
「先輩って優しいんですね・・・へへっ」
「あやな」
「え?」
「あやなって呼んでよ」
「あやな・・・?」
「そ!俺の名前!」
「あやな・・・素敵な名前ですね・・・」
「俺さ、勝田にさ、元気でいてほしんだ・・・前の彼氏のことも忘れさせてあげる・・・だから・・・」
「私と付き合って下さい!」
「いいのか?勝田・・・」
「先輩だったら忘れさせてくれるかななんて・・・」
「忘れさしてあげる!」
「あと、りくって呼んでよ・・・」
「りく」

カァァァァァァ・・・—
「あ。赤くなってる。ははっ可愛いな!」
「そんなこと・・・んっ・・・」
「・・・・・」
「あや・・・んっ・・・」
「・・・・・」
「くるし・・・んんっ・・・—」
頭がくらくらする・・・

「どーだ。忘れられそうか？」
「・・・かい」
「え？」
「もっかい」
涙を浮かばせながら言った・・・

「ん・・・」
「はぁ・・・はぁ・・・」
「はぁ・・・ふっう・・・」

「どーだった？」
「愛が入ってました。えへへ」
ぎゅううううう・・・
「あやな・・・くるし・・・」
「帰したくねえ！」
「帰りたくないよ・・・」
「今日はしょうがねえか！」
「ですね・・・」
「最後に一発いっとくか」
「え・・・」

私を抱きかかえて乱暴だけど心地良いキスをした・・・

「んっ・・・・・・」
「・・・」
キスをやめた・・・
でもすぐにキスをする
「はぁはぁ・・・」
「・・・」
「んっ・・・ふっう・・・」

「今日はこんだけ！」
「はーい・・・」
「じゃーな！」

そういいながら、ほっぺに優しくキスをした・・・

幸せな日々は続くわけでもなかった・・・

次の日いつもどおりに靴箱に立っていた・・・
そしたら・・・

「りくちゃあん」
咄嗟に後ろを向く・・・
3年の男子生徒？
「はい？」
「君さ、あやなと付き合ってんだって？昨日キスしてるところここの生徒にめっちゃ見られてたらしいよ」
「っつ・・・」
「俺らにもさ、」
「え？」
「キスしてよ」
手を引っ張られた・・・
グイッ・・・

どうしよ。力・・・強い・・・・。
「やだっ！離して！」
「キスしてくれたら離してやってもいいよ！」
「いや・・・好きじゃない人とキスなんてできない・・・うっ・・・・
うっ」

「こっち向けや！」
「いや！いや！絶対いや！」
「へ～・・・そんなこと言ってっと、エッチしろって言うよ？」
「・・・い・・・・・・・や・・・だってば・・・」
「くっそ・・・萎えたわー。お前、本当にあやなの女？胸はでかいようだけど・・・」
「彼女ですけど・・・どうしてですか？」
「あやなっつったら、付き合った女、ヤり捨てしてんだわ。あんたももうやっちゃった？」
「まだ・・・」
「やられそうになったら逃げろよ」
「はい・・・」
「あんたって、真面目だね。安心した。あやなを変えてやってくれよ。じゃーな。いくぞお前ら」
「「はい！」」

なんだ、良い人達じゃん・・・

あやなに合うの気まずいなあ・・・

「りく！」
ぎゅうううううう

「皆の前で抱きつかないでよ！」
「そんなに嫌なの？」
「皆が見てるもん・・・恥ずかしいもん・・・」
「みなさーん！こっち見てー！」
「何すんの？」
「キス！」
「は？」

ちゅうううううう
「「ヒューヒュー」」

「ん・・・」
「・・・」
「あやな！やめて！」
「ええーなんでー？」
「恥ずかしいから！」

それからずっと通りすがりの人にも
「バカップルが！あはは」
「もうしないのー？」

とか色々言われるはめに・・・

なんだかんだいって前の彼氏のことはふっ切れた気がした・・・

目の前になおきが現れなくなったことに気付いたのが遅かった・・・

―

Last LOVE~11~

「ねーねーお母さーん？」
「何ー？」
「なおきってどうしたのー？」
「あらー言ってなかったっけー？中川さん家、青森に引っ越したわよー。」
「うそ・・・でしょ・・・？」
「あらーほんとーよー。てっきりなおきくんから聞いてると思ったわー」
「聞いてない！聞いてないって！」
「でも、荷物取りに来週戻ってくるらしいわよー」
「そ・・・そっか・・・」
「今日、夕ご飯ギョーザでいい？」
「んー・・・」

「ごちそうさまー・・・」
「言おうか迷ってたんだけど・・・なおきくんね・・・」
「なおきがなに！？どうしたの！？」
「本当は来週末に渡してくれってことだったんだけど、」
「・・・」
手紙を手渡された・・・―
「手紙？」
「なおきくんがりくに渡してくれって頼んできたのよ・・・」
「お母さん！ありがと！」

ぺら・・・

―りくへ

色々、ありがとう。
迷惑かけたけど、お前といるときは楽しかったよ。
お互い新しいパートナーを見つけよう。
そのために俺はりくから離れるために親父の転勤先に着いて行こうと思う。
いきなりでごめんな。
この手紙を読んでるときは俺はもう青森にいる。
お前と会うこともない。
忘れてくれ。
俺はいつでも、りくの味方だし、
りくのことが大好きだ。

じゃあ、次、会えたときは2人ともパートナーが見つかってるといいね。
手紙。最後まで読んでくれてありがとう。

さよなら

なおき―

「なおきぃ・・・うっ・・・」

私は1時間泣き続けた。

やば・・・目腫れてるし・・・

「りくーおきなさーい。いくら休日だからってダラダラしてちゃだめよ！」
「んー」

「あー電話あったわよ。」
「誰からー？」
「あやな？って人ー」
「！あぁ・・・ありがとう。なんて？」
「１１：００に家まで行くって言ってたわよ」
「げっ。今９：００じゃん！」
「早く用意しなさいよー」
「うん！！！！！」

あやな・・・どうしたんだろ・・・

ピンポーン
「はー・・・い・・・」
「おっす！」
「あやな・・・」
「ちょっと出掛けねえ？」
「え？」
「気分転換に！」
「お母さんに言ってくるー」
「おー」

「いこっかー」
「で、どこいくの？」
「俺んち！」

「え・・・」
ぐいっ・・・・

「お邪魔しまーす・・・」
「今親いねえから」
「そ・・・そっか・・・」
「まぁ、そこ座ってー」
「はーい・・・」
「緊張しちゃってる？」
「そんなこと・・・な・・・んっ・・・んんんっ・・・・・・」
ドサッ・・・―

「やっちゃおっか？へへー」
「ちょっ・・・んんっ・・・」
私の、首、耳、唇を舐める彼・・・

やっぱ、体目当て？

『あいつ・・・ヤり捨てしてんだわ』
ドクンッ・・・

「やっ・・・！」
「・・・」
「やっぱり体目当てだったんだね・・・」
「やっぱりってなに？」
「あやなの友達が、ヤり捨てしてるって言ってた。」
「へぇ～」
「へぇってなに！？」
「りくって純粋っていうかピュアっつーっか、俺にはあわねえなあ」
「別れたいの？」

「俺、ピュアなやつとか純粋な奴嫌いなんだでも、りくは他とは違った。」
「なにが？」
「他には無いものを持ってた。」
「訳わかんないっ！」
「じゃあ、もう無理矢理しないから別れるとか言わないで？」
「ほんと？」
「誓う！」
「わかった」
「じゃあ誓いのキス。んー」
「は・・・？」
「りくからしてよー。いっつも俺からだしさあー。ぷー」
ぷちゅ・・・
ぐいっ・・・―

「ん・・・ん・・・・・・・」
「・・・」
「はぁっ・・・」
「どうしたのー？」
「もうあやなのせいで疲れたー。」
「ごめんごめん・・・」
「ていうか、なんで私を家に呼んだの？」
「試してみただけー」
「え？」
「拒否らなかったらどうしようって思ってた・・・」
「・・・」
「ありがとな・・・」
ちゅ・・・―

「！」

「りく？」
「ちょっと」
「外出てきていい？」
「俺も行く！」
「・・・」

ばたばた・・・

「なおき！・・・なおき！」
「りく？」
「やっぱなおきだ！」
「おう・・・」
「今日帰ってきてたんだ！」
「その人は？」
「この人？ああ、あやな！」
「彼氏か？」
「うん！」
「お前！何回とっかえひっかえする気だよ！誰にでも脚広げる女だと思われんぞ！」
「人の彼女につべこべ言うな。」
「あやな・・・」
「りく・・・さよなら・・・」
「ばいばーい！」

「あやな・・・」
「ん？」
「私ちゃんと笑えてたかなあ？はは・・・うっううっ・・・」
「笑えてたよ―」
「・・・」

「あれが、中川くんかあ。」
「・・・」
「好きなんでしょ？」
「え・・・あやなくんがす」
「俺は、本当の事が聞きたいよ。忘れさせる為に付き合ったから、
まだ好きでもしょうがないよ・・・」
「まだ好きなの・・・」
「知ってる・・・」
「・・・ごめんね・・・」
「俺が忘れさせてやるからな・・・」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0748v/

Last　LOVE

2011年8月20日03時17分発行